

2019年1月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

思索と実践

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含經典2』（ちくま学芸文庫）／実践の方法（道）に関する經典群／諦相應／
1 静居、4思惟

庭野日敬著『法華三部經 各品のあらましと要点』佼成出版社

(2) 主題

四つの聖諦を学ぶ意義について、考えてみたいと思います。

2. 諦(たい)

(1) 「諦」とは

今回学ぶ経文「静居」「思惟」は、「諦相應」の章にあります。「諦」について、増谷文雄博士は、次のように解説しておられます。

「『諦』とは、真理もしくは断言的命題をいうことばであるが、ここでは、もっと具体的に、
釈尊がかの初転法輪において説かれて以来、つねに仏教における実践の骨格として保持されてき
たところの四諦をゆびさしている」（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p.277）

釈迦牟尼世尊は初転法輪で、中道、四諦、八正道を説かれたと、経文「如来所説」にあります。
「四諦」は、それ以来、実践の骨格として保持されてきたわけです。

(2) 実践の骨格

「実践の骨格」とは、経営・ビジネスの世界で言う「フレームワーク」でありましょう。「フ
レームワーク」に示された手順通りに実践すれば、目的に到達するのです。

修行者が、「四諦」に示された手順通りに実践すれば、修行の目的に到達することができます
ので、「実践の骨格」と言っているのだと思います。

(3) 修行者の目的

増谷文雄博士は、修行の目的についての、二つの「きまり文句」を示しておられます。（増谷
文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.112）

① わが迷いの生はすでに尽きた。清浄の行はすでに成った。作すべきことはすでに弁じた。こ
のうへは、もはや迷いの生を繰返すことはないであろう。

② わたしの教えを聞いた聖なる弟子たちは、そのように観て、◎を厭い離れる。厭い離れるれば、
貪欲を離れる。貪欲を離れるれば、解脱する。

◎は、五蘊(色・受・想・行・識)、六処(眼・耳・鼻・舌・身・意、色・声・香・味・触・法)それぞれの要素です。

3. 静居して思索する

(1) 経文「静居(じょうきょ)」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、ラージャガハ（王舎城）のヴェールヴァナ（竹林）なる栗鼠養餌所にましました。

その時、世尊は、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、静居して思索につとめるがよい。比丘たちよ、静居して思索する比丘はあるがままに了知する」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.276）

(2) 静居して思索する

静居するとは、体を整え心を静めることです。そのようにして、大切なことを思索するのです。

(3) 了知する

「了知する」とは、「知り尽くす」ということです。「あるがままに了知する」とは、ものごとのありさまと、そこに働く法則を、ありのままに知り尽くすのです。

(4) 戒学・定学・慧学

仏教の修行は、戒学・定学・慧学に収まると言われています。

「戒学」は、自分の行為、生活を真理に合わせる努力をすることです。八正道の「正思・正語・正業・正命」、六波羅蜜の「布施・持戒・忍辱」にあたると思います

「定学」は、体を整え心を静めて、大切なことを思索することです。八正道の「正念・正定」、六波羅蜜の「禅定」にあたると思います。

「慧学」は、ものごとのありさまと、そこに働く法則をありのままに知り尽くすことです。八正道の「正見」、六波羅蜜の「智慧」にあたると思います。

八正道の「正精進」、六波羅蜜の「精進」は、「戒学・定学・慧学」の全体を、たゆみなく努力することです。

4. 四諦

(1) 経文「静居」

「それは、なにをあるがままに了知するのであろうか。

〈こは苦なり〉と、あるがままに了知するのである。

〈こは苦の生起なり〉と、あるがままに了知するのである。

〈こは苦の滅尽なり〉と、あるがままに了知するのである。

〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と、あるがままに了知するのである」（増谷文雄編訳『阿含経典

2』ちくま学芸文庫、p.276）

(2) こは苦なり

- ① 「〈こは苦なり〉と、あるがままに了知する」とは、自分の苦をありのままに悟ることで、「苦諦」とも言います。

「自分は、このことを、このように苦しんでいる」と、自分に起きている苦を、具体的に見定めるのです。

- ② 庭野日敬師は次のように解説しています。

「まず『苦諦』ですが、これはつまり『仏の教えを聞かない人びとにとっては、この世のすべてが苦しみである』ということです。人生は、第一に精神的な苦しみ、第二に肉体的な苦しみ、第三に経済的な苦しみ、その他いろいろな苦しみに満ちています。その人生苦から中途半端な逃げかくれかたをしないでその実態を直視し、見極めること、それが『苦諦』です」

(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.72)

- ③ 人は、真理を説く教えに出会わなければ、また、真理を説く教えを学ばず、実践しなければ、苦から脱することはできません。「仏の教えを聞かない人びとにとっては、この世のすべてが苦しみである」とは、このことを言っていると思います。

(3) こは苦の生起なり

- ① 「こは苦の生起なり」とは、自分に苦が生起した原因をありのままに悟ることで、「集諦」とも言います。

「集」とは、いくつもの迷いによる行いとその影響が集まって、苦の原因となっていることを表しています。苦が生じるには、いくつもの原因が重なっているのです。

- ② 苦の原因に、自分の手が届かないのであれば、自分ではどうすることもできません。

苦の原因が、自分の手の届くところであれば、自分の努力で何とかすることができます。

- ③ 自分が苦しんでいるときには、いくつもの原因のうちの、少なくとも一つは自分にあります。自分の中にある原因なら自分の手が届きますから、自分の努力で苦を解決する道を開くことができます。

- ④ 庭野日敬師は、次のように解説しています。

「『集諦』というのは、そういう人生苦はどうして起ったものであるかという原因を反省し、探求し、それをはっきりと悟ることです」(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p.72)

ここに「反省」とあります。自分を見て、自分の中にある原因を探求し、確認するのです。

(4) こは苦の滅尽なり

- ① 「こは苦の滅尽なり」とは、苦の原因が滅することによって苦が滅することを、ありのままに悟ることで「滅諦」とも言います。

「自分にある原因」を滅し尽くすことによって、苦がなくなることを確認するのです。

② 庭野日敬師は、次のように解説しています。

「『滅諦』というのは、そういう人生苦を消滅した安穩の境地です。精神的な苦しみも、肉体的な苦しみも、経済的な苦しみも、その他一切の苦しみを断ち切り、この世に寂光土を現出した姿です。それは、釈尊が悟られた「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」という三大真理を悟ることができてこそ、はじめて達せられる境地なのです」（庭野日敬著『法華經の新しい解釈』佼成出版社、p.72）

③ 自分が「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」を悟らず、実践してこなかったために、苦が次から次へと生じ続けたのです。この三大真理を悟り、実践すれば、苦は生じなくなるのです。

(5) こは苦の滅尽にいたる道なり

① 「こは苦の滅尽にいたる道なり」とは、「自分にある原因」を滅し尽くすには、自分がこのような道を歩めばよい、それが苦を残りなく滅する道であると悟ることで、「道諦」ともいいます。

釈迦牟尼世尊は、「苦の滅尽にいたる道」として、「八正道（正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）」をお示しになりました。

② 庭野日敬師は、次のように述べています。

「ところが、この三大真理を悟るということは、凡夫にとってはおいそれとできることではありません。それには、日々の修行と努力が必要です。すなわち、妙(心)、体(姿)、振(行動)の三面に、菩薩道を実践することです。もっとつっこんでいうならば、あとで説きます「八正道」と「六波羅蜜」に精進することです。これが、苦を滅する教え『道諦』です」（庭野日敬著『法華經の新しい解釈』佼成出版社、p.72~73）

5. 勉励

(1) 經文「静居」

「比丘たちよ、静居して思索につとめるがよい。比丘たちよ、静居して思索する比丘は、あるがままに了知することができる。それによって、比丘たちよ、

〈こは苦なり〉と勉励するがよい。

〈こは苦の生起なり〉と勉励するがよい。

〈こは苦の滅尽なり〉と勉励するがよい。また、

〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉励するがよいのである」

(増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p.276)

(2) 〈こは苦なり〉と勉励する

自分が、なにを、どのように苦しんでいるのかを見定めるのです。

- (3) 〈こは苦の生起なり〉と勉励する
自分の中にある苦の原因を明らかにしていくのです。
- (4) 〈こは苦の滅尽なり〉と勉励する
自分の中にある苦の原因を滅すれば、苦は滅することを見定めるのです。
- (5) 〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉励する
自分の中にある苦の原因を滅する道は、八正道の実践です。

6. 善からぬ愚かな思い

(1) 経文「思惟」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、ラージャガハ(王舎城)のヴェールヴァナ(竹林)なる栗鼠養餌所にましました。その時、世尊は、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、このような善からぬ愚かな思いを思惟しないがよい。

いわく、〈世間は常である〉といい、〈世間は無常である〉という。

あるいは、〈世間は限りがある〉といい、〈世間は限りがない〉という。

あるいは、〈生命はすなわち身体である〉といい、〈生命と身体とは別である〉という。

あるいはまた、〈人は死後なお存する〉といい、〈人は死後には存せず〉という。

あるいは、〈人は死後には存して存せず〉といい、あるいは、〈人は死後には存するにもあらず存せざるにもあらず〉という。

では、なにゆえに、そのようなことを思惟しないがよいというのであろうか。

比丘たちよ、そのようなことを思惟することは、なんの利益ももたらさず、梵行の出発点ともならず、また、厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に役立つものでもない」

(増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p. 281~282)

(2) 善からぬ愚かな思い

釈迦牟尼世尊は、「善からぬ愚かな思い」を列挙しています。

世間は常である、世間は無常である。

世間は限りがある、世間は限りがない。

生命はすなわち身体である、生命と身体とは別である。

人は死後なお存する、人は死後には存せず。

人は死後には存して存せず、人は死後には存するにもあらず存せざるにもあらず。

当時のインドの思想界では、このような議論が繰り返されたらしいのですが、釈迦牟尼世尊は、こうした議論を、「善からぬ愚かな思い」としました。

(3) 益せず

釈迦牟尼世尊が、弟子たちに、こうしたことから思惟しないようにと教えたのは、なんの利益（りやく）ももたらさないからです。

梵行の出発点になりません。

厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に役立ちません。

7. 勉励すべき思惟

(1) 経文「思惟」

「比丘たちよ、汝らが思惟するときには、〈こは苦なり〉と思惟するがよい。〈こは苦の生起なり〉と思惟するがよい。〈こは苦の滅尽なり〉と思惟するがよい。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と思惟するがよい。何のゆえであろうか。

比丘たちよ、それらのことを思惟することは、よく利益をもたらし、梵行の出発点となり、また、厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に役立つ。このゆえに、比丘たちよ、〈こは苦なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の生起なり〉と勉励するがよい。〈こは苦の滅尽なり〉と勉励するがよい。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉励するがよいのである」

（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 282）

(2) 勉励すべき思惟

釈迦牟尼世尊は、修行者たちに、次の4つの思惟を勧めました。

「こは苦なり」と思惟する

「こは苦の生起なり」と思惟する

「こは苦の滅尽なり」と思惟する

「こは苦の滅尽にいたる道なり」と思惟する。

(3) 勉励すべき理由

釈迦牟尼世尊が、修行者たちに、これらの思惟を勧めるのは、利益をもたらすからです。

梵行の出発点となります。

厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に役立ちます。

8. 「利益」について

(1) 「利益」とは

「利益（りやく）」とは、自分の目的を達成するために役立つことです。

釈迦牟尼世尊のもとで修行する修行者の場合は、「解脱・涅槃に役立つ」ことです。

(2) 梵行の出発点になる

利益のひとつは、「梵行の出発点になる」ことです。

「梵行」とは、「清浄な行い」ですが、ここでは「八正道」のことだと思われます。

- ① 修行者が、「世間は常であるか、無常であるか」と考えたり、他人と意見を闘わせたりしても、「八正道」の実践にはつながりません。すなわち、梵行の出発点になるという利益を得ることができません。
- ② 修行者が、「四諦」を思惟すれば、八正道の実践に導かれますから、梵行の出発点になるという利益を得ることができます。

(3) 厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に役立つ

利益のひとつは「厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に役立つ」ことです。

- ① 修行者が、「世間は常であるか、無常であるか」と考えたり、他人と意見を闘わせたりしても、厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に役立つという利益は得られません。
- ② 修行者が、「四諦」を思惟すれば、八正道の実践に導かれて、厭離・離貪・滅尽・寂靜・証智・等覺・涅槃に役立つという利益を得ることができます。